



フェリー航路の移転により遊休化していたターミナル。これを活用したのが「小松島みなと交流センター kocolo」だ。

遊休化したフェリーターミナルを、 まちの交流拠点に

【徳島小松島港本港地区】 **小松島みなと交流センターkocolo**(小松島みなとオアシス)

四国の東の玄関口として、古くから発展してきた徳島県小松島市。

ここでは往時の活気を取り戻すため、まったく新しい地域住民主体の試みが行われている。

その拠点となったのは遊休化していたフェリーターミナル。

常設の屋内フリーマーケットや農産物の直売所などが評判になり、

休日には家族連れでにぎわう注目のスポットとなっている。

■かつてのにぎわいを失った港町

律令制による地方行政区分「五畿七道」のうち、唯一、海をはさんだ地域が一つになっていたのが南海道である。現在の四国、和歌山、そして淡路島は、紀伊水道という海の道によって、かたく結びつけられてきたのだ。

そんな南海道にあって、小松島（古

くは中湖、のちに小松島湊と呼ばれる）は四国側の東の玄関口として古くから栄えてきた。四国の産物はここから奈良や京の都へと積み出され、また、源平合戦の時代には平家を追う源義経が上陸し、決戦の場・屋島へと向かっていったこともある。さらに時代がくたって近代になると、大阪や神戸、対岸の和歌山などと結ぶ航路が就航し、昭

和40年代には年間200万人もの人々が行き来するにぎやかな港町に発展していったのだ。

ところが、移動や物流の手段が自動車へとシフトしていくと、小松島はかつての活気を徐々に失っていくことになる。昭和58年には港と直結されていた旧国鉄の支線が廃止。本四連絡橋の開通などもあって定期航路は次々と姿



交流センター内にある飲食スポット「カフェ・メーヴェ」。コーヒー 250円、うどん300円など、気軽に利用できるメニューが魅力。

小松島・和歌山間のフェリー航路は、平成11年にお隣の徳島港へ移転。かつてのフェリー埠頭は絶好の釣りスポットとして人気を集めている。

を消し、最後まで残っていた小松島～和歌山間のフェリー航路も平成11年には徳島港へと移転してしまった。

「港に船が入らないと、人も来てくれないのですよ」。

NPO法人「港まちづくりファンタジーハーバーこまつしま」の理事長をつとめる白山林一さんが言うとおりの、人の集まる核を失った小松島の町は、中心エリアの空洞化という大きな問題を抱えるようになったのだ。

■旧ターミナルを交流の拠点に

平成12年、遊休化していたフェリーターミナルが小松島市に無償譲渡されることが決まったとき、その利用法をめぐって数多くの意見が交わされた。当然ながら、町の再活性化は行政にとって最大の課題だったが、実際に施設を運営したり、イベントを開催するとなると何かと制約が多いのも事実。そこで誕生したのが、NPO法人（特定非



ヨットで小松島を訪れる人のために作られたビジターハーバー。給水・給電施設付きで、1日500円という低料金で係留することができる。写真上（写真提供・NPO法人「港まちづくりファンタジーハーバーこまつしま」。下も）

昨年10月に開催された「小松島みなとわいわいフェスティバル」。みなとオアシスとして周辺エリアの整備が進めば、このような屋外イベントもさらに盛り上がっていくだろう。写真下



かつて待合室として使われていた2階のホールで開かれていた「古いレコードを聴く会」。メンバーだけでなく、誰でも懐かしのメロディーにひたることができる。

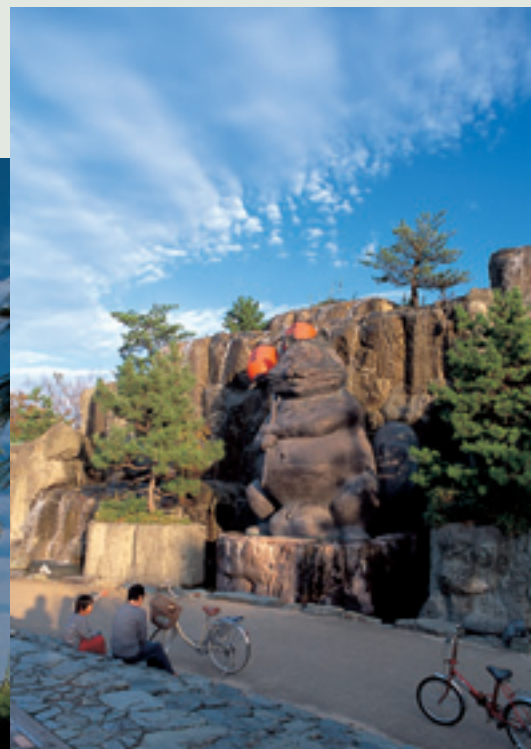


営利活動法人)「港まちづくりファンタジーハーバーこまつしま」による「小松島みなと交流センター kocolo」なのである。

現在、交流センターには常設の屋内フリーマーケット、農産物の直売所、飲食施設などがあり、かつて待合室として使われていた2階のホールや畳敷きの部屋も市民の会合などに広く開放されている。運営にあたる「港まちづくりファンタジーハーバーこまつし

ま」の事務局長、松本真樹さんは、その狙いを次のように語ってくれた。

「企画・立案の段階でテーマとなっていたのは、港周辺の活性化だけでなく市民参加というスタイルでした。そこで中心に据えようと提案したのが常設フリーマーケットです。誰でも気軽に参加でき、いつでもオープンしているフ



小松島市に伝わる金長タヌキ伝説。NPO「港まちづくりファンタジーハーバーこまつしま」では、そんなタヌキにちなんだイベントも企画中。

交流センターに隣接する港湾緑地「しおかせ公園」。さまざまな遊びが楽しめるので、子連れのファミリーだけでなく若者にも人気だ。

リーマーケットというのは、出店者にとっても、消費者にとっても、つまりはすべての人々にとっても便利なものになると思ったのです」。

■出店者にも、客にもメリット

休日の朝、小松島みなと交流センターkocoloの前には、軽トラックやワンボックス車が次々と横付けされていく。近郊の農家の人たちが、収穫したばかりの農産物を直売所に運び込むためだ。そして、とれたての野菜や果実がずらりと棚に並ぶころ、9時のオープンを待ちかねたように近所の人たちが集まってきた。

「スーパーで買うより安いし、新鮮だし、しかも誰がどこで作ったものかすぐにわかるので安心なんですよ」。

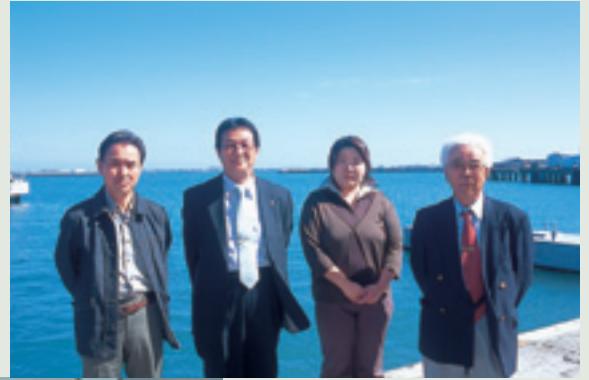
ふだんから野菜類はすべてここで買っているという主婦は、その理由をこう教えてくれた。

やがて時計の針が10時をまわり、となりのフリーマーケットがオープンすると、交流センターには子どもを連れたファミリーの姿が目立ちはじめ、さらににぎわいを増していく。衣類や日用雑貨、装飾品や古本といったバラエティに富んだ商品が、出店者ごとランダムに並べられた陳列スペースを歩いていくのは、大人にとっても、子どもにとっても、じつに楽しいひととき。ちょっとした宝探しの気分なのだろう。「子ども服はすぐに小さくなってしまいうじゃないですか。ここに来れば新品同様の品が格安で手に入るの本当に助かっています」。

小さな女の子の連れた母親は両手いっぱい衣類をかかえ、満足そうな表情でレジへと向かっていった。

平成14年5月にオープンした小松島みなと交流センターkocoloのなかでも、常設フリーマーケットは特に好評で、今年9月からは売り場面積を従来の3倍にまで拡大している。出店者の数はおよそ150人、買い物に訪れる人の数は年間に10万人近く。一度は閉鎖されたフェリーターミナルの建物が、人々の集まる場所として、再び機能しはじめたのだ。

NPO法人与行政が密接に連携しながら運営される交流センター。その活動の中心となっている小松島市産業振興課の川口忠雄課長、木村秀チームリーダー、NPOの松本真樹事務局長、白山林一理事長（左から）。



10月9日に開催されたみなと観光交流促進についての第2回協議会。地元有志や市民代表らによって、小松島みなと交流センターkocoloで開催するイベントについて積極的な議論が行われた。

■人々が集うみなとオアシスに

行政の協力のもと、地域住民が主体となって進める港周辺の活性化。そんな小松島の活動をさらにバックアップするのが「みなとオアシス」という制度である。

これは市町村が住民と連携して作成した計画に対し、国土交通省の地方整備局が認定・登録を行い、さまざまな支援を実施していこうというもの。いわば既存の港湾施設や海岸、マリナーなどを活用した地域交流拠点であり、現在、全国の29港（仮登録含む）が登録を受けている。

平成16年8月に本登録された小松島みなとオアシスでは、交流センターに隣接する港湾緑地「しおかぜ公園」の整備、イベント会場としても利用できる駐車場の改修などが急ピッチで進め

られている。

「このあたり一帯は、3年後には緑あふれる素晴らしい場所に生まれ変わる予定です。いまはそんな環境を生かせるイベントづくりに取り組んでいるところです」（松本事務局長）。

「一般の人にとって港は物流の拠点にすぎませんが、そこで暮らす者には生活の場そのものなのです。これからは海から見た港だけではなく、陸から見た港づくりがたいへん重要になっていくでしょう」（白山理事長）。

そんな2人の言葉から浮かび上がってくるのは、人々の暮らしと密接に結びついた、活気あふれる交流の場。港や海岸を拠点とし、地域住民が主体となって推進する、まったく新しい形のまちづくりが動き出している。

（取材・文/佐々木 節 写真/横山正次）